

いしはらくぼ
石原窪古墳群
いしはらくぼ
石原窪1号墳

1997

静岡市教育委員会

序 文

静岡市は温暖な気候・海、山、川と変化に富んだ地形など、豊かな自然に恵まれ、永い年月にわたって人々の営みが積み重ねられてきました。市内にはこうした遠い祖先の生活を偲ばせる、かけがえのない文化遺産である遺跡が地中に多数存在しています。これらはできる限り現状のまま保存してまいりますが、開発事業等により、保存することができない場合には、図面・写真等記録による保存に代えるため、発掘調査を実施しております。これは裏を返せば発掘調査の陰には遺跡の消滅があるということであり、調査の報告は、失われてしまった遺跡を調査記録に基づいて報告書の中で再生させ、後世に伝えるという非常に重要なことでもあります。

このたび、刊行の運びとなった『石原窪1号墳発掘調査報告書』は、昭和61年度に静岡大学教育学部の自然観察実習地造成に伴い、静岡大学からの依頼を受けて静岡市教育委員会が実施した発掘調査の報告であります。

発掘調査から10年の歳月が流れております。発掘調査の件数の増加の一方で調査の報告が遅れていることは否めませんが、今後、市内各所で行なわれた発掘調査の結果を順次皆様に公表していくよう、努力してまいります。

最後に、文化財保護にご理解とご協力をいただきました静岡大学、ならびに発掘・整理作業に携わった方々に厚くお礼申し上げます。

この報告書が教育・文化・学術研究などに広く活用されることを期待します。

平成9年3月

静岡市教育長
石 田 徳 行

例 言

1. 本書は、昭和61年度国立静岡大学教育学部自然観察実習地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査として、昭和62年1月7日～1月31日に実施した、静岡市大谷字石原窪5543に所在する石原窪古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、静岡大学からの発掘調査の依頼を受けた静岡市教育委員会が主体となり、岡村渉（社会教育課学芸員）を発掘調査担当者として派遣し、杉山彰梧（同主査、現同係長）が法的事務手続きを担当し、その他の経費支出に伴う事務は静岡大学が行なうという形で調査を実施した。一部亀山雅弘（当時社会教育課指導主事）が調査を援助した。
3. 資料整理・遺物の写真撮影は、織田恵（社会教育課非常勤嘱託）を中心に岡村と行ない、一部八木広尚（社会教育課）の協力を得た。
4. 本書の執筆・編集は織田が行ない、杉山及び岡村の指導と協力を得た。
5. 調査資料は全て静岡市教育委員会社会教育課が保管している。
(連絡先 〒420 静岡市追手町5番1号 054(254)2111(代))
6. 資料整理にあたっては以下の方々の協力を得た。
大畑智子、尾崎りつ子、増田智子、鈴木亜紀子

凡 例

1. 本文及び実測図に記した高度は、海拔高度をもって示した。
2. 地図中の方位は真北を示し、実測図中の方位は磁北を示す。
3. 実測図の縮尺は地形実測図は1/200、墳丘測量図1/100、石室実測図1/50、遺物出土状況図1/20、土器実測図1/3、鉄製品実測図1/1に統一している。
4. 遺物観察表中における〈 〉は現存の法量、() は推定復原の法量を示す。
5. 古墳施設の名称は浜松市教育委員会『半田山古墳群（Ⅳ中支群一浜松医科大学内一）』1988の凡例を参考にしている。
6. 本文中においては、敬称を略した。

本文目次

序 文 例 言 凡 例 目 次

第1章	発掘調査に至る経緯	1
第2章	発掘調査の経過	2
第3章	石原窪古墳群の位置と環境	3
	1. 地理的環境	
	2. 歴史的環境	
第4章	古墳の調査	11
	1. 石原窪1号墳	〃
	a 外部施設	〃
	b 内部施設	11
	c 主体部出土遺物	14
	1号墳出土遺物観察表	21
	2. 石原窪2号墳	22
	a 検出遺構	〃
	b 出土遺物	〃
	3. 石原窪3号墳	22
	a 検出遺構	〃
	b 出土遺物	〃
	2・3号墳出土遺物観察表	25
第5章	総 括	26
	引用・参考図書	28

挿図目次

第1図	調査区配置図	3
第2図	周辺の遺跡分布図	4
第3図	調査位置図	6
第4図	現況地形測量図及びトレンチ配置図	7・8
第5図	トレンチ土層断面図	9・10
第6図	1号墳墳丘実測図	12
第7図	1号墳周溝内遺物出土状況図	13
第8図	1号墳石室実測図	15・16
第9図	1号墳石室礫床面及び掘り方・遺物出土状況図	17・18
第10図	1号墳出土遺物実測図	19
第11図	1号墳出土遺物実測図	20
第12図	2・3号墳平面実測図及び土層断面図	23
第13図	2・3号墳出土遺物実測図	24

図版目次

図版	1	古墳群遠景
図版	2	発掘調査前近景
図版	3	1号墳全景
図版	4	1号墳全景
図版	5	奥壁・東壁・西壁
図版	6	上位及び下位礫床面・奥壁（根石状態）
図版	7	根石状況全景・周溝内及び石室内遺物出土状況・破碎礫散布状況
図版	8	前溝部遺物出土状況・土層断面
図版	9	1号墳出土遺物①
図版	10	1号墳出土遺物②
図版	11	2・3号墳（I・Jトレンチ）検出状況
図版	12	2・3号墳（I・Jトレンチ）出土遺物

第1章 発掘調査に至る経緯

石原窪古墳群の所在する静岡市大谷字石原窪は、静岡市と清水市との中間に位置する独立丘陵である有度丘陵の西麓に位置する。この丘陵は地質年代的には若く、主に砂礫によって構成されているために浸食を受けやすく、緩やかな斜面が形成され、数多くの開析谷が発達している。このような地質、地形により一帯では早くから土地利用が追求され、茶畑や蜜柑畑としての開墾が進むなど人の手が加わってきた。そして近年、市街地化の発展に伴い宅地造成や学校建設・道路建設などの開発が急速に進み、未開発の部分は丘陵の上部に残された。

このような開発に伴い、多くの遺跡が発見されたが、その中には十分な調査を実施しないままに消滅してしまったものもあった。石原窪古墳群に近い静岡大学の構内や周辺の片山地区などにも、旧石器時代～縄文時代の遺物散布地や横穴群・古墳群等が存在し、大学建設や道路建設などの開発に伴い消滅したものも少なくない。

周囲の遺跡分布状況からみると、本古墳群の所在する地域にも、古墳等の遺跡が存在する可能性は無いとはいえなかったが、これまで遺跡の存在は確認できず、遺跡として認識されてはいなかった。

ところが、昭和61年にこの地に静岡大学教育学部の自然観察実習地を造成することとなり、工事が開始された。そして同年10月23日に古墳の石室の一部が工事中に発見された。このため工事を一時中断し、静岡大学と静岡市教育委員会との緊急の協議の結果、静岡大学が当時発掘調査体制を持たなかったため静岡市教育委員会に発掘調査を依頼し、市教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施することになった。新たに発見された古墳は発見した地点の字名をとり、また付近の他の古墳群との立地状況の類似から古墳群を構成するものと推定し、石原窪1号墳と名付けた。

これにより、昭和62年1月7日より昭和62年1月31日までの予定で、発見された石原窪1号墳と昭和61年度工事実施地区を対象に発掘調査を実施し、同時に昭和62年度以降に工事の予定されている地区に、古墳等の有無を確認するためのトレンチによる試掘調査も実施した。

第2章 発掘調査の経過

発掘調査は、200㎡の調査対象面積を、昭和62年1月7日から1月31日までの期間で行った。

調査区設定 (第1図)

発掘調査では建設工事の測量のため設置された杭列を基準に調査用方眼を設置した。これは市道の上に設置されたNa0杭から東に10m毎に設けられた杭列で、この基準線を1ラインと呼称した。

1ライン上のNa0杭から東へ65mの杭をaポイントと仮称し、10m毎にb・c・d…とした。aポイント上で1ラインに直交するライン(Aライン)を設定し、同様にb・c・d杭上にBライン・Cライン・Dライン・Eラインを設定した。次にAライン上でaポイントから10m南に1ラインに平行する2ラインを、その更に南10mに3ラインを設定しほぼ調査予定範囲内に10m方眼をかぶせた。(ただし調査時点の杭は第1図a～eのように必ずしも10m方眼上についでないが、事前工事により2ライン上に杭列を設置できなかったためである。)

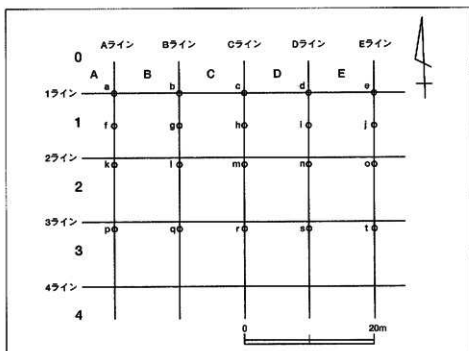
標高についても建設工事の測量時に設置したレベルをそのまま使用した。

調査の経過

調査は、まず古墳群の存在する丘陵の斜面全体の地形測量を実施し、その後石室の発見された場所を中心に放射状にトレンチを設定し古墳の規模や周溝の範囲等の把握に努めた。その後、石室内の発掘と実測、及び遺物の取り上げを行なうとともに、周溝及び前溝部の掘り下げを進め、完掘後墳丘測量を実施した。

またそれと並行して、昭和62年度以降の工事実施地区に古墳の存在する可能性が考えられるため、トレンチによる試掘調査を行なった。トレンチを入れた箇所は1号墳の東側にあたり、Iトレンチ(幅約1m、長さ約30m)、Jトレンチ(幅約1m、長さ約24m)の2本を斜面に平行に設置した。Iトレンチにおいては石室及び周溝を検出するとともに遺物を検出し、Jトレンチにおいては周溝と考えられる溝状の落ち込みを確認し、その中から遺物を検出した。試掘調査終了後、両トレンチを埋め戻した。この試掘調査の結果により存在の確認された2基の古墳を、それぞれ石原塚2号墳、3号墳と名付けた。

その後、静岡大学に遺跡調査会が設立され、今回の試掘調査により遺構の検出された地点については静岡大学で対応する旨の回答を得ており、静岡大学付属小学校改築に伴う駿府城跡三ノ丸の調査は同調査会で行われているが、本古墳群については結果的に未調査のまま施設建設が行われたらしく誠に遺憾である。



第1図 調査区配置図 (縮尺 1/500)

第3章 石原窪古墳群の位置と環境 (第2図)

1. 地理的環境

石原窪古墳群は静岡市大谷字石原窪5543番地に所在する。当地は、静岡・清水両平野に跨る独立丘陵である有度丘陵の西麓の標高約80mに位置する。JR静岡駅からは東南方向に約4.5kmの位置である。有度丘陵は、洪積世に安倍川の前身の河川の堆積物や入江状の浅海底の堆積物がドーム状に隆起した地質学的には若い丘陵である。この丘陵は砂・礫・粘土の互層からなるため、浸食を受けやすく、丘陵の東側(清水市側)及び南側(久能海岸)は著しい海食を受け、海食崖が形成されている。一方北側から西側にかけては内陸方向を向いているため、河川による浸食が顕著で全面に開析谷が発達しており、谷の入り口部分には、谷を流れ下る小河川により小扇状地が形成されている。また、丘陵の北麓から西麓には緩やかな傾斜をもつやや平坦な斜面が広がり、これらは開析谷により区切られ、大きく10個の台地状の地形を呈している。これら台地状の斜面の末端部分は緩やかなスロープとなって平野部分へと至る。

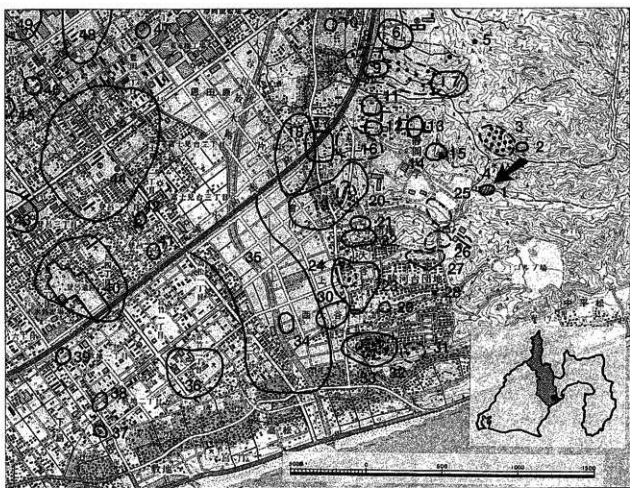
2. 歴史的環境

有度丘陵における人類の営みはかなり古い段階から存在したことが認められている。当古墳群の周辺における遺跡の分布を見てみると、第2図のように旧石器時代～歴史時代に至る遺跡がある。旧石器時代の遺跡には、宮川遺跡、大段1遺跡がある。

縄文時代には斜面西麓の平坦部に遺跡が多く認められる。宮川地区には縄文時代早期の遺物が検出された、宮川遺跡がある。西大谷地区には縄文時代中期の遺構の確認されている上ノ山遺跡があり、北原ノ丘の末端部分には、縄文時代後期の遺構・遺物の検出された蛭田遺跡(文献1)がある。また、丘陵の西側に広がる平野部には元宮川・神明原遺跡(文献2)があり縄文時代後期～晩期の遺物が検出されている。このほか池田、小鹿、片山地区では縄文時代の土器や石器が発見されているなど、かなり広い範囲に人々の生活が及んでいたものと思われる。

弥生時代の遺跡は、有度丘陵の西方に広がる平野部に、弥生時代中期を中心とした水田を伴う集落及び周溝墓の検出されている有東遺跡(文献19)や、後期の水田を伴う集落の登呂遺跡、沙入遺跡が分布しており、やや丘陵に近い位置には、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構の確認されている元宮川・神明原遺跡がある。丘陵上にも弥生時代の遺跡は分布しており、寺ノ久保遺跡、宮川遺跡(文献12)、上ノ山遺跡(文献17)で住居などが確認されている。

古墳時代の遺跡は、前述のように開析谷に区切られた台地状の平坦部分に分布している。まず宮川遺跡、上ノ山遺跡において円形周溝墓及び方形周溝墓が検出されており、弥生時代の墳墓から高塚形式の古墳への変遷を示唆する手がかりとして注目される。その後各地区に横穴式石室をもつ古墳群が形成されるようになるようである。現在までに確認されている古墳群は北側より、谷田古墳群・池田山古墳群・小鹿古墳群・静岡大学構内古墳群・奥大谷古墳群・宮川古墳群・井庄段古墳群・上ノ山古墳群が挙げられよう。これらのなかで上ノ山4号墳(不動山古墳)が古墳時代中期後半と考えられ、それに続くのが、宮川4号墳(諏訪神社古墳)の中期末葉～後期初葉であるが、ほとんどは後期以降に築造されたものであると考えられる。



第2図 周辺の遺跡分布図(縮尺 1/25,000)

遺 跡 名		時 代	遺 跡 名		時 代
1	石原藩古墳群	古墳	26	井庄谷横穴群 (北)	古墳
2	遺物散布地	旧石器・縄文	27	井庄谷横穴群 (南)	古墳
3	奥大谷遺跡	縄文 (前)	28	日向山古墳	古墳
4	奥大谷古墳群	古墳	29	遺物散布地	縄文
5	堀ノ内山奥古墳	古墳	30	蛭田遺跡	縄文 (後)・古墳
6	堀ノ内A遺跡	縄文 (中)	31	東大谷古墳群	古墳
7	堀ノ内山遺跡	弥生	32	上ノ山古墳群	古墳
8	小龍古墳群	古墳	33	上ノ山遺跡	縄文～古墳
9	堀ノ内B遺跡	弥生	34	大谷横井之坪居館跡	中世
10	遺物散布地	縄文	35	元宮川神明原遺跡	縄文～中世
11	大段Ⅰ遺跡	旧石器	36	汐入遺跡	弥生・古墳・中世
12	大段Ⅱ遺跡	縄文 (中)	37	遺物散布地	弥生
13	大段Ⅲ遺跡	縄文	38	下島遺跡	弥生～古墳
14	ささこ段遺跡	縄文	39	水洗遺跡	古墳
15	さそく段古墳	古墳	40	登呂遺跡	弥生 (後)・古墳
16	静岡大学構内古墳群	古墳	41	天神森遺跡	古墳
17	片山鹿寺跡	奈良・平安	42	遺物散布地	古墳
18	片山遺跡	弥生 (後)・古墳・近世	43	麻ノ道遺跡	弥生～古代
19	宮川 (小段) 遺跡	旧石器～古代・近世	44	有東遺跡	弥生 (中・後)・古墳・中世
20	宮川古墳群	古墳	45	有東岩跡	中世 (戦国)
21	清泉寺窪瓦窯跡	奈良・平安	46	有明遺跡	弥生 (後)
22	清泉寺窪遺跡	縄文	47	三菱工場内遺跡	古墳・奈良・平安
23	井庄段遺跡	縄文・弥生	48	豊田遺跡	弥生～古墳
24	井庄段古墳群	古墳	49	小黒遺跡	弥生 (後)～古墳
25	片山横穴群	古墳			

池田山古墳群においては1965年に、静岡英和女学院短期大学の建設工事に伴い、2基の横穴式石室をもつ古墳が調査されている（文献13）。工事により墳丘や石室は破壊を受けていたため詳細は不明であるが、2号墳から多数の馬具が出土している点が注目される。

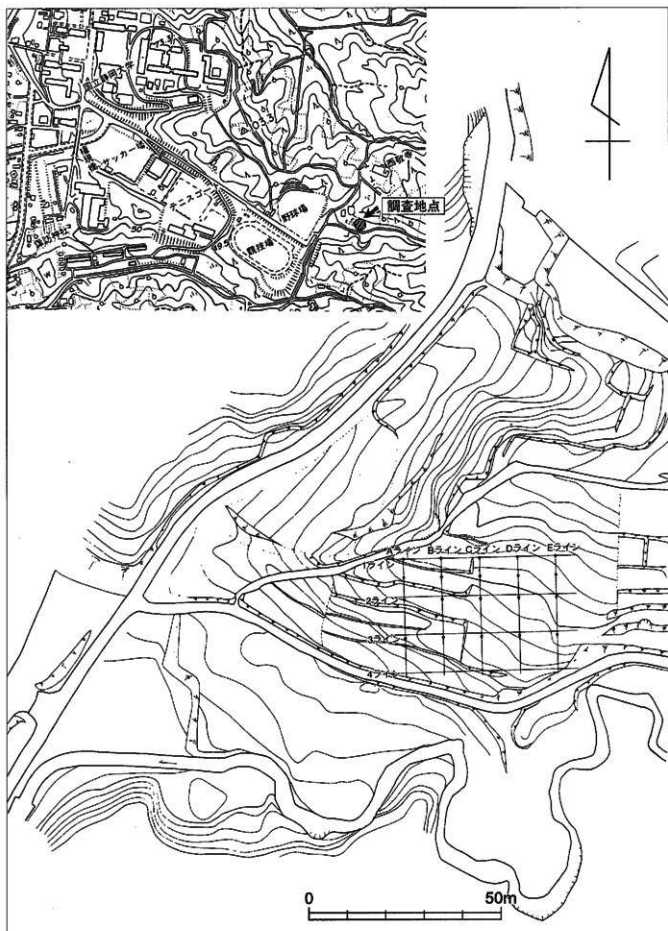
小鹿古墳群には、横穴式石室内に組合式箱形石棺と刳拔式石棺を有する小鹿6号墳（小鹿山神古墳）をはじめ、その支群と考えられる堀ノ内山古墳群（小鹿14号墳～18号墳）を含めてこれまで18基が確認されている。堀ノ内山古墳群は1963年に静岡市教育委員会によって調査され、横穴式石室をもつ小円墳で構成されることがわかっている（文献3）。

静岡大学構内古墳群は静岡大学の大谷への移転に伴い1966年～1973年にかけて静岡大学により調査されており、最近では1996年に新たに調査が行なわれるなどして、計11基の古墳が確認されている。詳細は不明であるが、古墳時代後期から終末期にかけての横穴式石室をもつ古墳群と見られる。奥大谷古墳群は未調査であるが、終末期とされている。周辺では石原窪古墳群と位置的にも近い古墳群であるため、その関係を探るためにも今後の調査報告の待たれるところである。

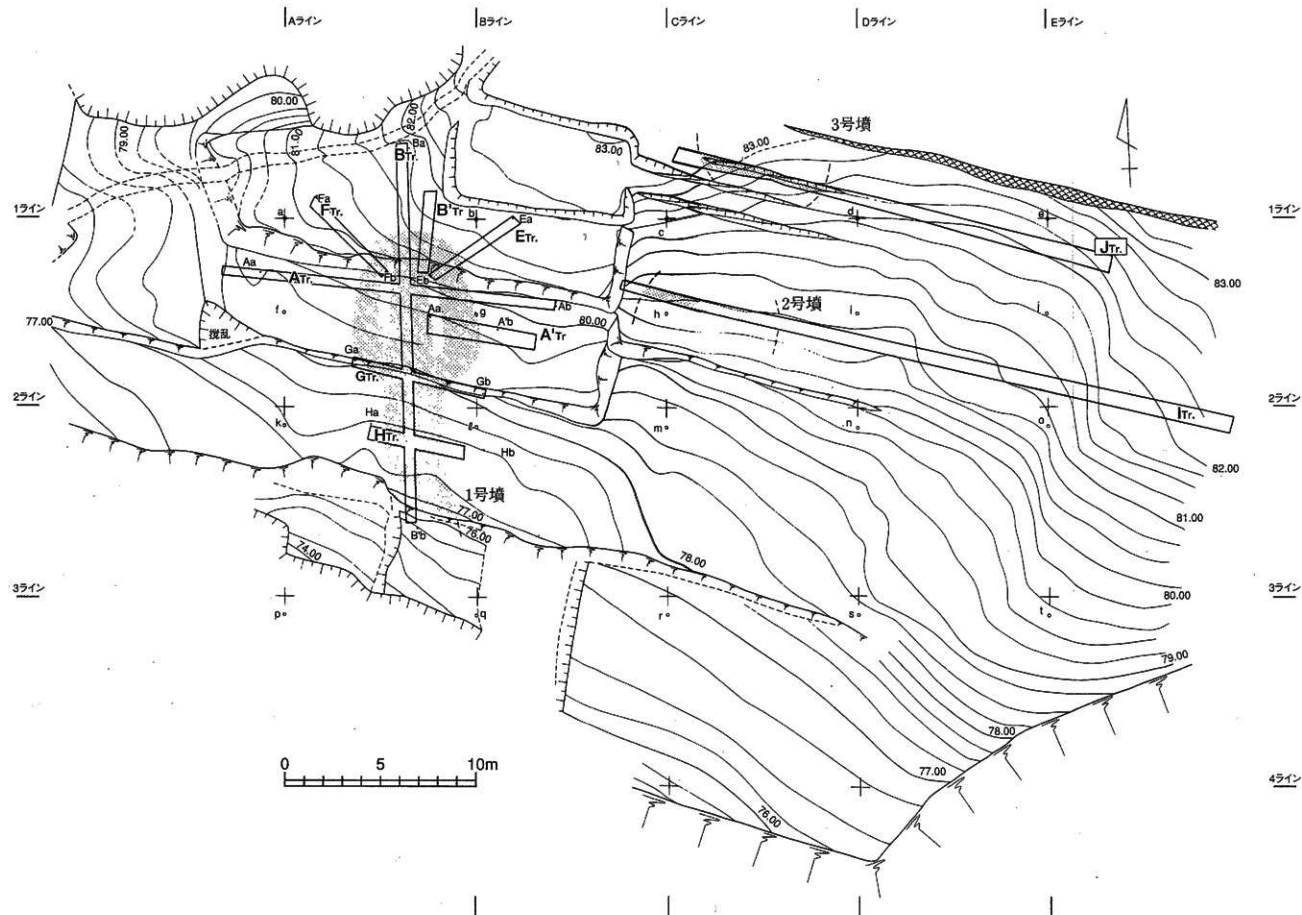
宮川地区には宮川古墳群があり、古くから地元では「セツヤグラ」と呼ばれており、おそらくは7基以上の古墳からなる古墳群であったと推測される。方墳で横穴式石室内に家形石棺と組合式箱形石棺を有する宮川1号墳（丸山古墳）（文献9）をはじめ、1974年に静岡市教育委員会によって測量調査が行なわれた同4号墳（諏訪神社古墳）、1973年に同教育委員会により発掘調査が行なわれた方墳の同7号墳（アサオサン古墳）が知られている。測量調査の結果から4号墳（諏訪神社古墳）は全長40mの帆立貝式古墳であろうとされ、7号墳（アサオサン古墳）は横穴式石室の中に3つの箱形石棺を安置した一辺が約18mの方墳である。この宮川古墳群の北方の谷の奥部には、片山横穴群が存在していた（工事により消滅）。

井庄地区には、丘陵の末端部に井庄段古墳群があり、静岡市教育委員会によって1968年と1972年に調査がなされ現在までに2基の古墳が確認されている（文献11）。この奥部には伊庄谷横穴群（北支群・南支群）があり1962年・1972年・1982年・1984年とこれまでに4次の調査が行なわれており、北谷支群で30基・南谷支群で30基以上が確認されている（文献14・15・16）。海側に近い東大谷地区にもいくつかの古墳群が知られており、上ノ山古墳群や東大谷古墳群が存在する。

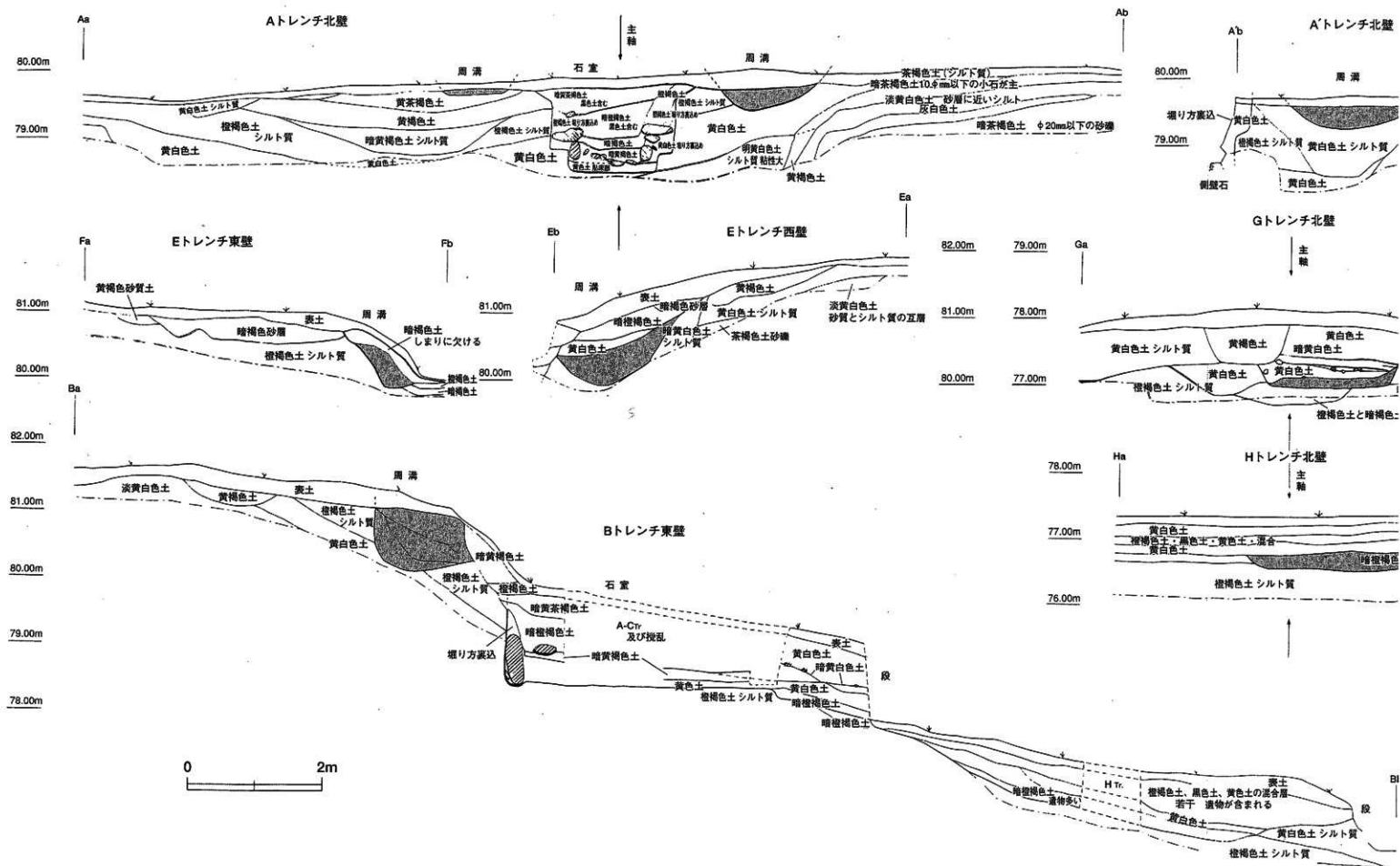
古墳以外の遺跡には、大谷川流域に広がりをもつ元宮川・神明原遺跡が確認されており、その後に続く歴史時代の遺跡としては、駿河国分寺跡に推定されている片山廃寺跡と、その瓦を生産した清泉寺窟瓦窯跡が知られている。



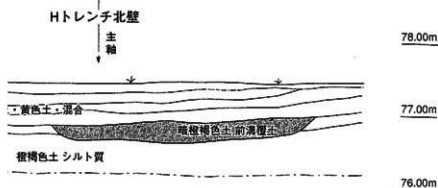
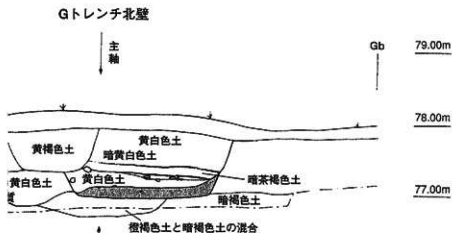
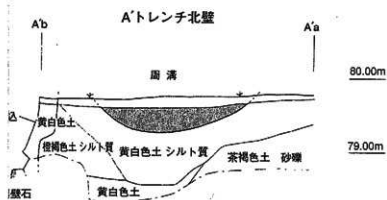
第3図 調査位置図(縮尺 1/1,000)



第4図 現況地形測量図及びトレンチ配置図(縮尺 $\frac{1}{200}$)



第5図 トレンチ土層断面図(縮尺1/60)



第4章 古墳の調査

1. 石原窪1号墳

a. 外部施設

墳丘 本古墳は調査区B-2区に位置する。現状の観察ではもとより、地形測量を実施しても墳丘の高まりは確認できなかった。墳丘規模は周溝の形状より長径約8.6m、短径約6.8mの南北にやや長い円墳である。盛土は後世の削平により残存していないが、奥壁後背部の周溝の底部から、高さ約0.3mの墳丘が確認できた。現存する墳丘の標高は78.5mである。

周溝 周溝は主体部の周囲を楕円形に墳丘を廻り、石室開口部の付近で前溝部に吸収される。断面の形状は底面がやや平坦なU字状を呈する。周溝の北側は主軸部分で上端幅1.95m、底部幅0.7m、深さ1.4mを測り、東側周溝は中央部で上端幅1.9m、底部幅約1.05m、深さ0.6mを測り、西側周溝は中央部以南は重機による掘削で破壊されているが、残存する北西部分で上端幅1.2m、底部幅0.8m、深さ0.85mを測る。

前溝部（墓道） 前溝は主軸より約4°東にふれ、南方向から伸びる。上端幅約3.2m、底部幅約2.3m、深さ約1.0mを測る。奥壁より7.7mまで確認することができたが、後世の造成により途中で大きく段が造られ、これにより切られてその先は確認できなかった。

また東側周溝と前溝の交わる辺りの溝底に破砕礫が集中して検出された。破砕礫を除去すると下から須恵器等の遺物が検出されたが、これらの礫は周溝内にのみ存在するため古墳造成に伴うものではなく造成後間もなくなんらかの理由で捨てられたものと考えられる。

外部施設出土遺物 古墳北東部の周溝内においてほぼ完形の須恵器の壺（22）と坏（21）が、近接して周溝の底面にほぼ接するような状態で検出された。周溝内からはその他に坏蓋（5・6・7）、坏（8・14）が出土している。前溝部では坏蓋（2・3・4）、坏（12・13）、長頸瓶（15・16・17・18）土師器坏（20）、広口壺／甕（24）、土師器の底部らしき破片が3点（図示できず）が出土している。周溝部の破砕礫の下からは坏（11）坏蓋（2）が出土し、坏蓋（2）は前溝部からもその破片が出土し接合できた。

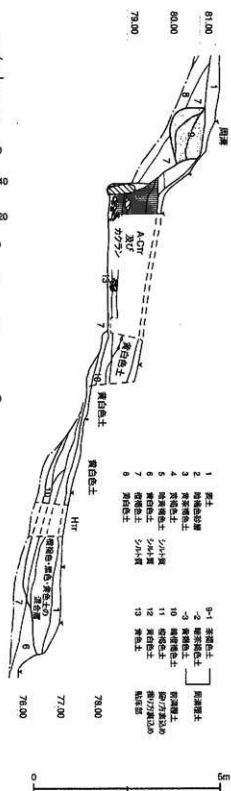
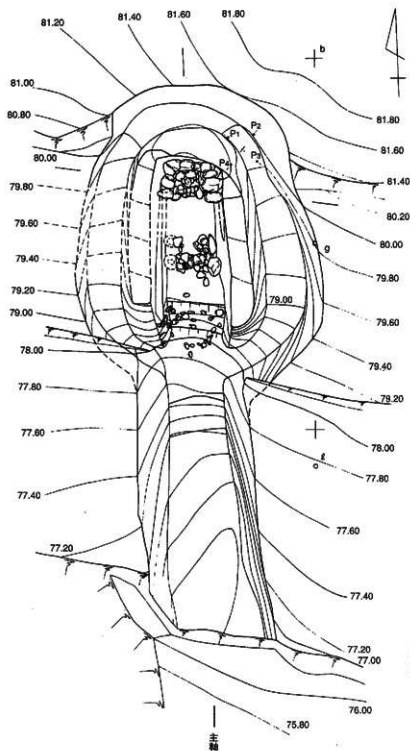
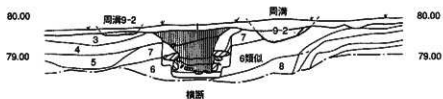
b. 内部施設

玄室 本古墳は無袖式の横穴式石室で、主軸をN-1°-Eにとり、南に向かって開口する。天井石は残存していない。側壁は両側とも上部が残存しておらず、また工事のため奥壁から0.9mの位置までしか残存していない。玄室の規模は据え跡からの推定で石室長2.9m、石室幅は奥壁部分で0.65m、最大幅は玄門付近で0.85mを測る。

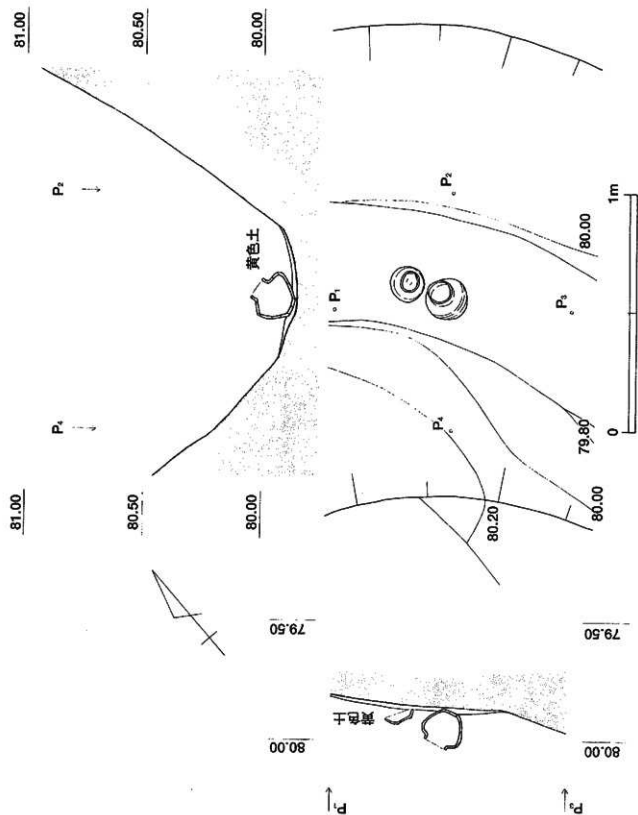
奥壁石は1段が残っており、自然礫2枚を横に並べて広口積みし、現存の高さは0.75mである。側壁は東側で4段、西側で2段が残り、現存の高さは0.9mである。

玄室床面には工事によって壊された部分を除いて円礫が敷かれ、上位・下位の2面が確認された。上位礫床面には比較的小さい直径約15cm～20cmの円礫が用いられ、下位礫床面には直径約20cm～30cmのやや大きめの円礫が用いられている。礫床は奥壁より約2.9mの地点で終わり、素掘炭道は奥壁から約3.6mの地点から始まり、段を伴って下方に傾斜しており、周溝を吸収して前溝部に移行する。この段の部分に円礫が散布している状況を確認したがこれは閉塞石の一部と考えられる。

掘り方 地山を直方体状に掘り込み、根石付近で一部テラス状に段掘りして基底面はほぼ平坦に造る。根石は円礫を用い掘り方にほぼ沿うように広口積みに据えられ、2段目以上はちょうど掘り方のテラス



第6図 1号墳 墳丘実測図 (縮尺 1/100)



第7図 周溝内遺物出土状況図 (縮尺 1/20)

状の部分に石が載るようなかたちで小口積みされている。

上縁部で幅約2.0m、長さ5.1m、基底部で幅約1.3m、長さ4.7m、深さは奥壁付近で1.8m、中央部で1.3m、羨道部付近で1.25mを測る。

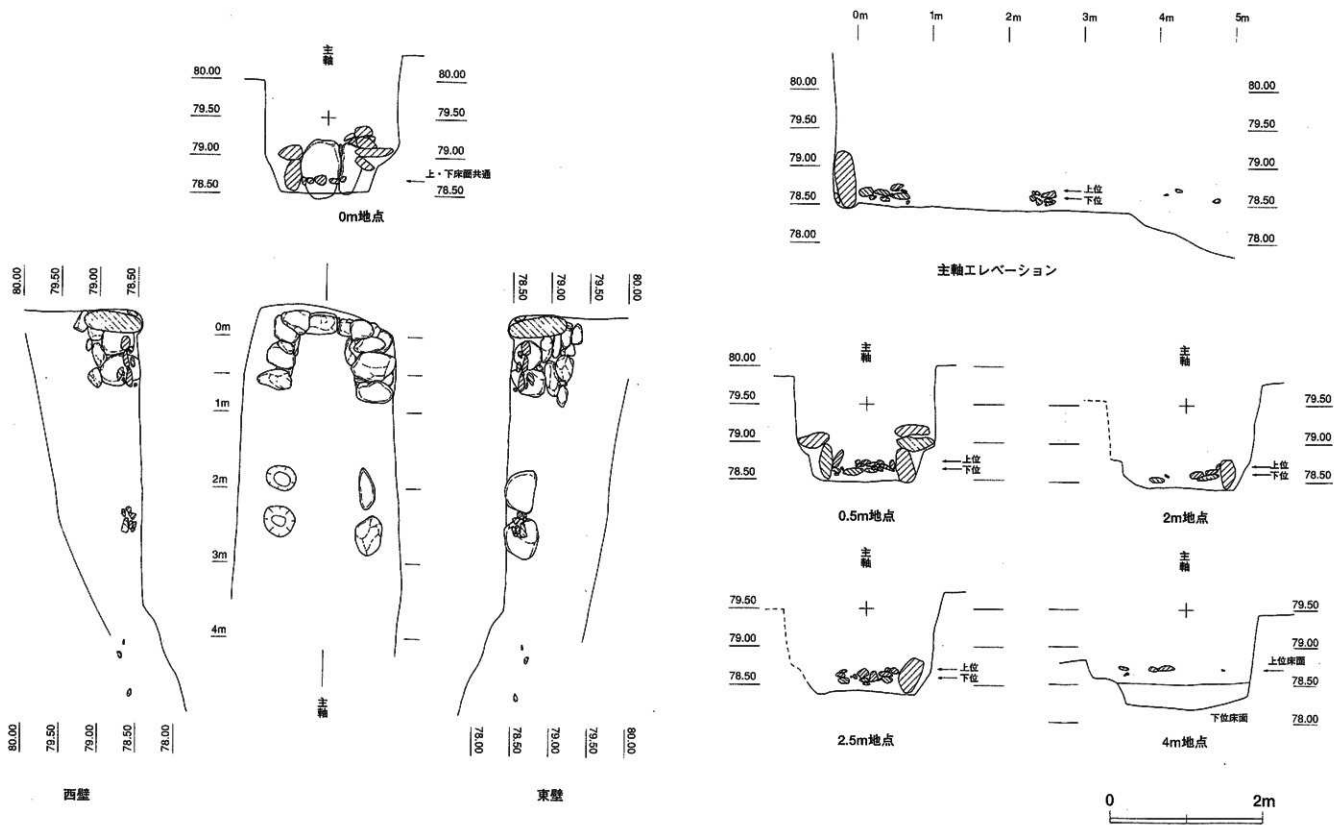
c. 主体部内出土遺物

石室内で検出された遺物はわずかである。石室床面から刀子片と思われる鉄製品の破片(23)と須恵器の坏の小破片(図示できず)が検出された。羨道部からは坏蓋(1)、坏(9)が検出された。

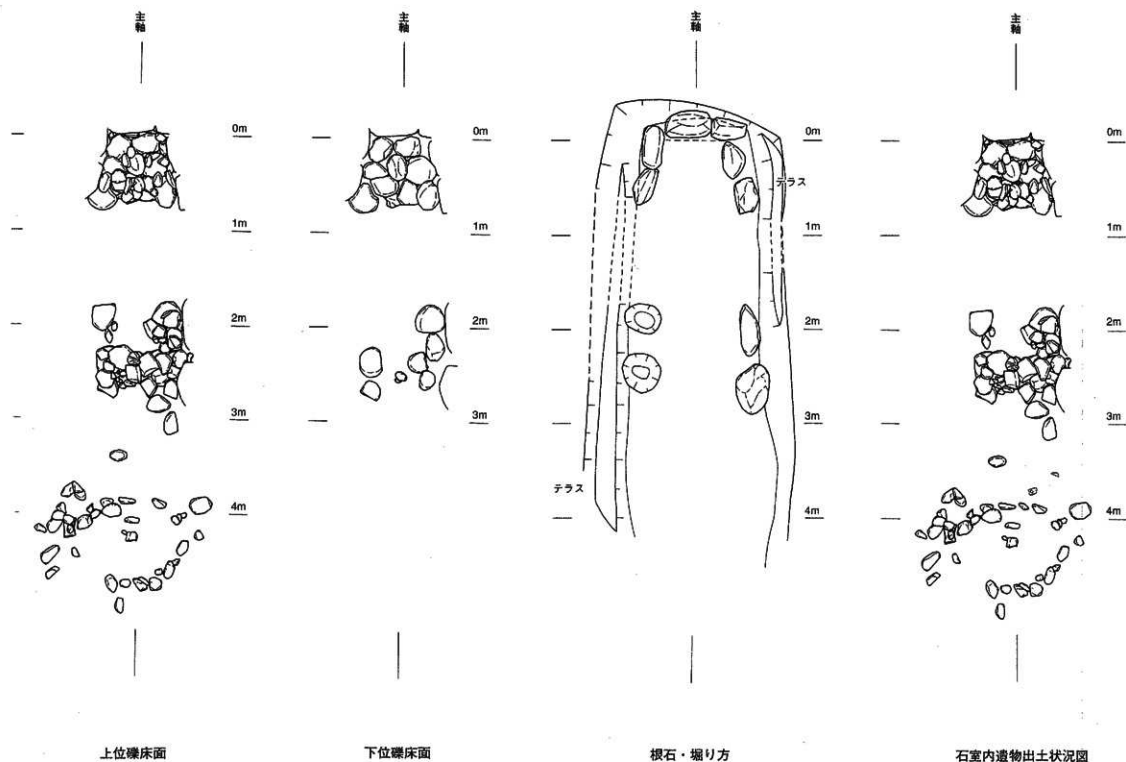
d. 古墳築造時期等

かなりの攪乱を受けているため、石室からの検出遺物はわずかで、周溝部や前溝部からの検出がほとんどであり、時期を検討するのは困難であるが、前溝部および周溝部で出土した坏蓋・坏の破片と周溝内北東部で出土したほぼ完形の壺・坏からは、7世紀末～8世紀初頭という時期的な位置付けが得られた。

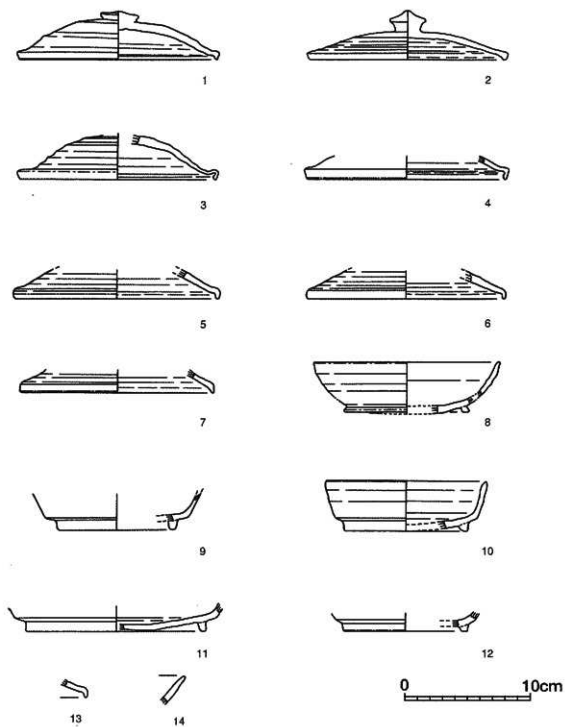
このことに攪乱が著しいことと礫床面が2面あり追葬があったらしいことを含めて考えると、築造時期を7世紀末かそれ以前に、追葬時期は8世紀初頭までの間に求められるものと考ええる。



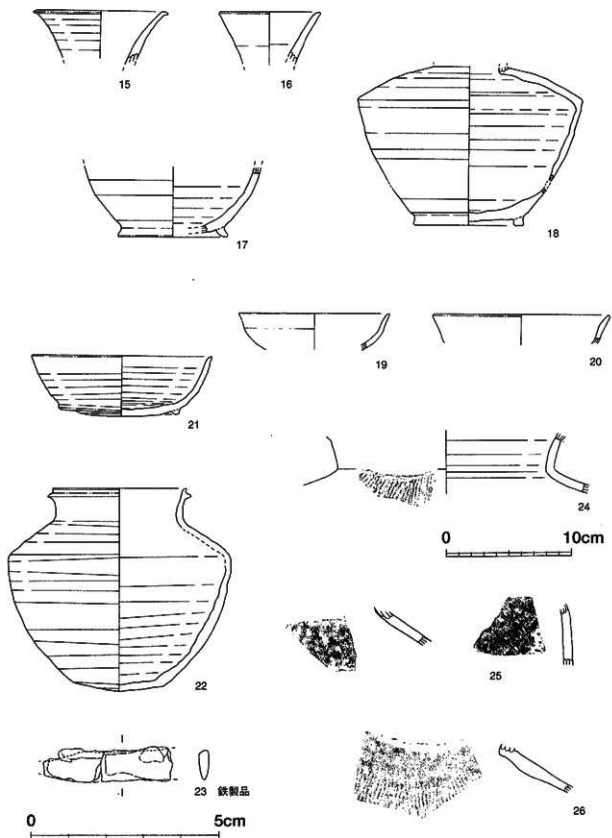
第8図 1号墳 石室実測図(縮尺 $\frac{1}{50}$)



第9図 1号墳 石室礫床面及び根石掘り方、遺物出土状況図



第10図 1号墳出土遺物実測図①(縮尺 $\frac{1}{3}$)



第11図 1号墳出土遺物実測図②(縮尺 1/4 鉄製品のみ1/1)

石原窪1号墳遺物觀察表

No.	種名	産地・標高	体長 (cm)	測距方法	形態・論文	肌色・皮膚	腹色・小腸の特征	存在・その他	備考
1	短尾壁環蛇	鹿児島県？	口径 (16.1) 体高 3.85 尾高 3.6 尾長 0.0	外側 1/2測距ナデ 2/3測距ヘラケズリ 内側 同ナデ	扁平で中央が盛り上がるが、 やや左側が盛り上がる。高台は コナダにより前面に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.10, 13, 25 記27, 28
2	短尾壁環蛇	前清部 (前清部の下)	口径 (16.0) 体高 (3.8) 尾高 2.8 尾長 0.0	外側 1/2測距ナデ 1/3測距ヘラケズリ 内側 同ナデ	扁平で長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	やや暗 やや不 灰色色	残存 口径2/1 距離 砂・1/4測	第90回 図説 注記No.48, 58
3	短尾壁環蛇	前清部	口径 (15.5) 体高 (3.5)	外側 1/2測距ナデ 1/3測距ヘラケズリ 内側 同ナデ	扁平で長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.68, 57
4	短尾壁環蛇	前清部	口径 (16.1) 体高 (1.85)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平はコナダにより下方に引 いて受変をする。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.64
5	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (16.1) 体高 (2.3)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平はコナダにより下方に引 いて受変をする。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.1, 41
6	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (16.0) 体高 (2.2)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平はコナダにより、直ま み強い受変をする。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.21, 47, 48
7	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.4) 体高 (1.5)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平はコナダにより下方に引 いて受変をする。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.43, 44
8	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (4.2) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.40, 42, 45
9	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (4.2) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.40, 42, 45
10	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.60
11	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.56, 59
12	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.20
13	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.19
14	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.29, 39
15	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.51
16	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.52
17	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.18
18	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.62, 63
19	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.38
20	短尾壁環蛇	東海 内海内？	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.7
21	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.29, 39
22	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.49
23	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.62, 63
24	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.38
25	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.7
26	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.29, 39
27	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.49
28	短尾壁環蛇	東海 内海内	口径 (15.0) 体高 (3.9) 尾高 (10.0)	外側 同ナデ 内側 同ナデ	扁平は長く中央部の高台が、 尾端を尖らすように前方に角状に 出る。	暗土 褐色 褐色	暗土・小腸の特征 なし なし なし なし	残存 砂・1/4測 距離 清らか	第90回 図説 注記No.62, 63

2. 石原窪2号墳

a. 検出遺構

本古墳はC-1区とD-1区において分布し、トレンチによる試掘調査で確認された。標高80.75mに位置する。Iトレンチ内で石室と東側周溝、それと西側周溝と考えられる溝を検出した。東側周溝は上縁幅約0.7mを測る。遺物検出面での確認であるため、周溝の底部幅や周溝の形状は未確認である。東側周溝の覆土から、須恵器壺／甕破片が検出されている。

石室は遺物検出面で、直径15～20cm程度の円礫が平面的にまとまって存在している部分がありこれを石室と判断した。石室の上縁幅は1.1mであるが、その他の規模は確認していない。

b. 出土遺物

東側周溝から須恵器壺／甕(34・35)が検出されている。石室部分からは須恵器坏蓋(28)、須恵器坏(29・30)が検出された。

3. 石原窪3号墳

a. 検出遺構

本古墳はD-0区に位置し、トレンチによる試掘調査で確認され石原窪3号墳とされた。標高82.50mに位置する。Jトレンチ内で周溝と考えられる溝状の落ち込みと石室と考えられる集石部を検出した。西側周溝は上縁幅1.25m(現存)を測る。東側周溝の部分では周溝の西側上縁は確認することができたが、東側の上縁は確認できなかった。西側周溝は南に向かって幅がやや狭まっていくのが観察された。

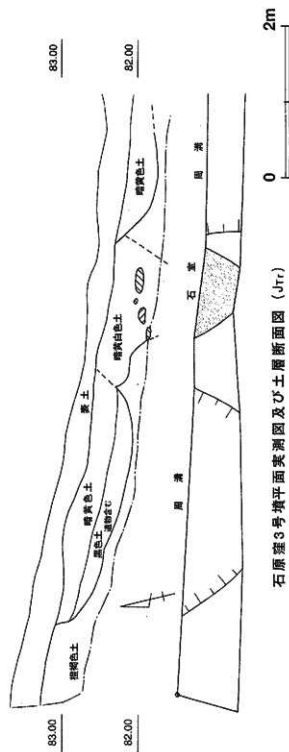
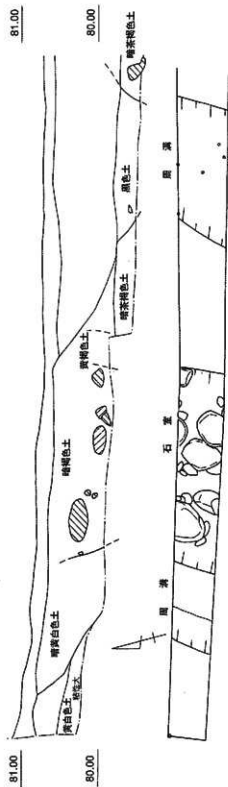
b. 出土遺物

西側周溝の覆土から須恵器坏蓋(36)、坏(37)、壺／甕(39・41)、トレンチ中央部から須恵器壺／甕(40)が検出された。

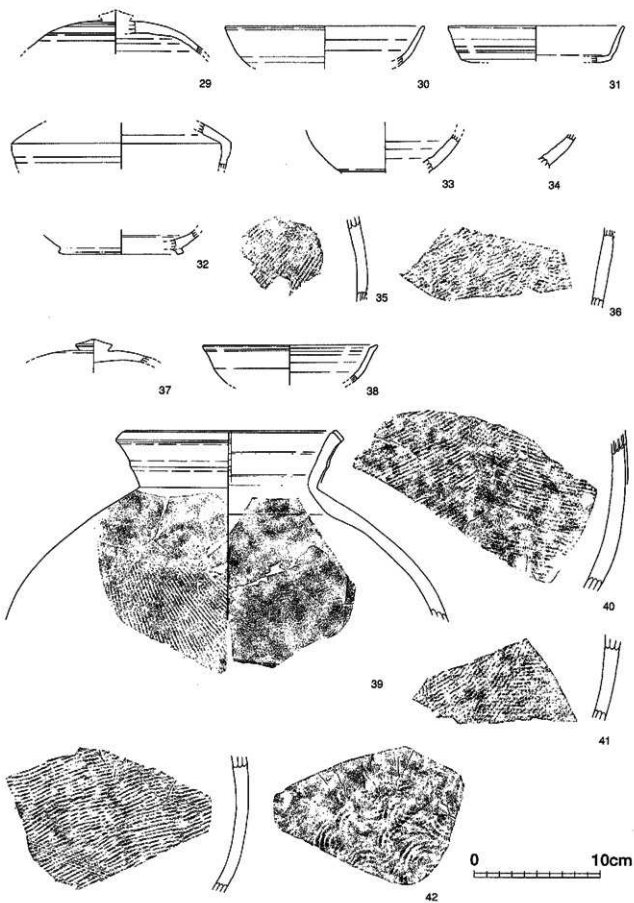
また、西側周溝覆土から出土している壺／甕(38)の口縁部破片が、2号墳の東側周溝覆土出土の肩部破片と接合することから、斜面上方の位置にある3号墳の西側周溝と下方の2号墳の東側周溝はなんらかの関係があると考えられる。

4. 古墳築造時期等

2・3号墳ともトレンチにより一部確認されただけであるため古墳の規模は不明であるが、確認した周溝の幅や、石室と周溝の間隔などから推定するとほぼ1号墳と同規模の古墳であると考えられる。また、出土遺物もほとんどが小破片で、明確な時期を導くことが難しいが1号墳出土の遺物と比較すると、ほぼ同時期程度と考えられる。



第12図 2・3号墳 平面実測図および土層断面図(縮尺 $1/50$)



第13図 2・3号墳出土遺物実測図(縮尺 1/5)

石原窟古墳群遺物観察表(2号墳・3号墳)

No.	種類	所在地	法長 (cm)	調査年度	形態・装文	出土・構成等	保存・その他	備考
29	須恵器 環蓋	2号墳 石室内	口径 器高 (2.55)	外面 細粒ヘラズリ 内面 同粒ナデ	縁は欠損しているため不明。 全体はつねり状をみせると考えらる。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 縁・基部欠損 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.71, 72
30	須恵器 石室内	2号墳 石室内	口径 器高 (16.0) (3.2)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁・縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.71
31	須恵器 環蓋	2号墳 石室内	口径 器高 (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部に強い段をもち、口縁は直 文ぎらに開く。端部はわずかに 反りしめく収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁・縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.71
32	須恵器 長頸瓶	2号墳 墓の上の土中	口径 器高 (1.9) (2.5) (10.0) 頸部径 (17.5)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	高台は断面内角を呈し外に開く。 肩部に強い段があり、肩一 部部にかけて灰緑色の自然釉が かかる。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 高台部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
33	須恵器 鉢	2号墳 墓の上の土中	口径 器高 (2.7)	外面 細粒ヘラズリ 内面 同粒ナデ	縁部の体部か?	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 頸部下半部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.77
34	須恵器 鉢	2号墳 墓の上の土中	口径 器高 (2.85)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ		粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 頸部下半部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.77
35	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
36	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
37	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
38	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
39	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
40	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
41	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79
42	須恵器 甕・甕	2号墳 墓内周溝	口径 器高 (1.9) (2.9)	外面 同粒ナデ 内面 同粒ナデ	縁部は口縁に向かって緩やかに 開く。端部は丸く収める。	粘土 赤 褐色 色調 赤褐色	残存 口縁部 器面 滑らか	第13図 図版12 注記No.76, 79

第5章 総括

石原窪1号墳

1号墳は発見時すでに墳丘は全く確認できなかったが、調査によって主軸方向にやや長い円墳と確認された。前溝（墓道）は古墳の位置する斜面の下方（南方）わずかに東寄りの方向から延びていることが確認できた。玄室掘り方は、2段目の石が載る位置があらかじめテラス状に段掘りされているが、広口積みの根石の上に2段目以上を小口積みにするやや不安定な積み方を支えるためであろうか。床面は2面あり、比較的大きい礫を用いた下位礫床面と、比較的小さい礫を用いた上位礫床面が確認されている。このことより、少なくとも2回の埋葬があったことが推定できるが、玄室の攪乱が著しく遺物の出土状況から埋葬位置や埋葬に伴う副葬品のセット関係を明らかにすることはできなかった。

時期的な位置付けであるが、確実に埋葬に伴い、かつ原位置を保っていたと考えられる遺物が検出できなかったため明確には言えないが、遺物の時期差から築造時期や追葬の可能性を検討してみる。まずほぼ完形で出土した周溝北東部の甕と坏であるが、この坏は底部が半球形で高台より下がるタイプで、高台の断面は四角形でやや外反ぎみに付く。このタイプの坏は静岡県考古学会シンポジウム編年（以下シンポジウム編年と略す）によると、V期前半の資料と位置付けられている用宗・石部古墳群の資料と非常に近似しており、7世紀末から8世紀初頭という年代が与えられると思われる。また、周溝の玄室開口部付近や前溝部から検出された坏・蓋はそのほとんどがシンポジウム編年でV期のやや前半程度に位置付けられることから、やはり7世紀末～8世紀初頭という年代が与えられる。個々の遺物に大きな時期差は認められず、このことから実際に追葬が行われたことを導くのはやや難しいが、玄室床面が2面あることからその可能性を指摘するにとどめる。

静岡平野における終末期古墳は用宗・石部古墳群や平城古墳群において調査されており、用宗浅間坂上2号墳・3号墳・石部1号墳・5号墳、平城5号墳・10号墳が7世紀末～8世紀初頭に位置付けられている。この時期の古墳は石室が小規模化し、石室長はほとんどが3メートル以下で、石室幅は最大でも1メートルに満たない。これらの中には平城5号墳・10号墳のように組合石棺状の小さな石室をもつ最終末期の形態の古墳があり火葬墳墓の可能性も検討されているが、現在までのところ8世紀第1四半期の段階では確実に火葬墳墓とできるものは見つかっていないということである（文献20）。石原窪古墳群もこれらの終末期古墳とほぼ同時期のものと位置付けられるが、石室内の攪乱が著しく埋葬形態が不明であるため断定はできないものの火葬墳であった可能性は少ないものと思われる。

古墳の被葬者の性格については、遺物が須恵器・土師器と刀子片（？）に限られ、特定することはできなかった。

石原窪2・3号墳 2・3号墳はどちらもトレンチによる確認にとどまったため墳丘や周溝、主体部等の規模や形状、また主軸方向なども明らかにすることができなかったが、検出した溝状の遺構や坏蓋・坏等の遺物が検出されたことより、横穴式石室を内部主体とする古墳であると考えられる。2・3号墳とも、確実に埋葬に伴ったと考えられる遺物が検出できず、また破片に限られているため、時期的な位置付けを行うことが困難で、1号墳の遺物との比較からほぼ同時期のものではないかという推定にとどまざるを得ない。しかし、この時期が実際に2・3号墳が古墳として機能していた時期とできるかどうかは不明である。

各古墳の関係

1号墳と2・3号墳との関わりであるが、1号墳の前溝（墓道）は調査区内において確認できた範囲

では枝分かれするような状況はみられず、これらの古墳が墓道により結ばれていたかどうかは不明であるが、2・3号墳の遺物の接合からみると、2・3号墳については墓道により結ばれていた可能性も否定できない。出土遺物から行った時期的位置付けでは、これら3基の古墳に大きな時期差は認められず、比較的近い時期に造営されていたと考えられる。

周辺の遺跡との関わり

周辺の古墳群の分布状況をみると、まず有度丘陵の平野部に最も近い地域に古墳群の集中がみられ、石原窪古墳群と奥大谷古墳群はやや丘陵側に入ったところに位置している。古墳群の集中しているのは丘陵突端の緩やかな斜面上で、標高20メートルから60メートルの高さであり、石原窪古墳群・奥大谷古墳群は、標高80メートルから100メートルという分布傾向の違いが指摘できる。

古墳がその地域におけるなんらかの制度・秩序を反映しているとするならば、古墳の規模や古墳群の分布の違いは被葬者の性格を表すものであり、また古墳の築造にあたってはなんらかの制限があったと考えることができる。こうしたことを踏まえて、有度丘陵における古墳群の分布の違いから、本古墳群の性格的な位置付けを行ってみることにする。

まず各々の古墳群の造営時期を検討すると、低い標高に分布する古墳群は大きく2つに分類できよう。

① 6世紀中葉からほぼ7世紀前半までを古墳の造営期間とし、複数の石棺や副葬品に馬具を伴うなど古墳の規模も比較的大型であり有力な被葬者が想定される古墳を含むものである。

小鹿古墳群・宮川古墳群

② ①より若干遅れる6世紀中葉に造営が始まり7世紀末または8世紀初頭にまでおよぶもの。静岡大学構内古墳群（詳細は不明であるが7世紀前半～8世紀までとされている）・上ノ山古墳群・伊庄段古墳群。

①②はともに造営開始時期が後期であり、このことから後期古墳群はその分布においてはほぼ共通する立地にあるといえる。池田山古墳群は標高80メートルという比較的高いところにあるが、6世紀後半から7世紀前半という時期の古墳群であり、おおむね①として分類してよいと考える。

これらと比較すると古墳時代終末期になって石原窪古墳群が造営されるのは、後期の古墳群とは距離・標高ともに離れており、明らかに②とは異なる。未調査のため終末期古墳群ということしかわかっていないが奥大谷古墳群もまた同様のことが指摘できる。

また、有度丘陵西麓は静岡平野では現在のところ唯一横穴墳が分布する地域であり、この分布は古墳群が形成される丘陵突端の緩やかな斜面上とは異なり、丘陵を開析する谷に面した比較的急な斜面に開口している。造営は6世紀中葉から7世紀末に及ぶとされ、時期的には周辺の横穴式石室墳群と併存していたことになるが、この近接した地域に異なる造営形態がほぼ同時期に存在していたことは、被葬者の属する共同体の性格が明らかに違うことを表したものと考えるであろう。伊庄谷横穴墳は標高の高い位置にあるものが時期的に古いとされており（文献14）、平野に近いところから造営が開始された横穴式石室墳とは異なる意識が働いていたことがここにも窺えるのではないだろうか。

これら有度丘陵西麓に墓域をもっていた人々の生活域はどこであったのかという問題であるが、平野部を流れる大谷川流域に元宮川・神明原遺跡が確認されていることからこの西側か東側には確実に人の居住があっただろう。地形的に検討すると、この大谷川の東側の丘陵と平野の境はちょうど有度丘陵の谷筋に形成された小扇状地上にあたり、水利に恵まれ生活域として適していたことが窺われる。堀田遺跡の発掘調査によって古墳時代前期～後期の遺構・遺物は検出されているものの（文献1）、居住域は現在まで明らかになってはいない。今後の調査事例を待ちたい。

まとめ

まだ調査事例が少ないため不明な点も多いが、現時点での有度丘陵西麓の後期古墳群の分布状況をまとめると、おそらく生活域であろう平野部に最も近い丘陵末端部分に後期になっていくつかの古墳群の形成が開始され、一部では終末期になるまで続く。これらの古墳群は方墳を中心とすることや古墳の規模やその副葬品に馬具をともなうことなどからも地域における政治的・経済的に有力なクラスであった可能性が高い。これとは別に終末期になってから造営を開始する古墳群があり、この一群は石原塚古墳群のように後期古墳群とは異なった位置に単独に近い形で分布する傾向にあり、その上比較的短い期間で造営が終了するようである。このことは、それまで古墳を造営していなかった被葬者層が終末期になって古墳を造営するようになったことの反映とみてよいのではないかと。

本古墳群が発見された状況を考えて周辺には未確認の古墳がまだ存在することが予測でき、今後の調査・検討に期待したいが、2・3号墳が確認された地点は現在すでに未調査のまま施設建設がなされたらしく、本古墳群の性格を追求できる機会を逸したことは誠に遺憾である。

引用・参考図書

- 1 『蛭田遺跡』 1990 静岡市教育委員会
- 2 『大谷川Ⅱ(遺構編)本文編』 1987 (財)静岡県埋蔵文化財研究所
- 3 『駿河堀ノ内山古墳群』 1967 静岡市教育委員会
- 4 『静岡市史 原始古代中世』 1981 静岡市
- 5 『静岡県史 資料編 2』 1990 静岡県
- 6 土隆一『静岡・清水地域の地質(改訂版)』 1976 静岡商工会議所
- 7 『駿河 用宗石部古墳群』 1965 静岡市教育委員会
- 8 静岡県文化財調査報告書 第42集 『静岡県の窯業遺跡 本文編』
1989 静岡県教育委員会
- 9 『駿河丸山古墳』 1962 静岡市教育委員会・静岡工業高校
- 10 川江秀孝『静岡県下の須恵器について』〔須恵器—古代陶質土器—の編年〕
1979 静岡県考古学会
- 11 『駿河伊豆段古墳』 1979 静岡市教育委員会
- 12 『駿河宮川遺跡』 1975 静岡市教育委員会
- 13 『駿河池田山古墳』 1968 静岡英和女学院
- 14 『伊豆谷横穴群』 1983 静岡県教育委員会
- 15 『駿河・伊豆谷横穴墳』 1984 静岡市教育委員会
- 16 『伊豆谷横穴群 上(遺構編)』 1984 静岡市教育委員会
- 17 『上ノ山遺跡発掘調査(第一次)概報Ⅰ 遺構編』
1984 静岡県教育委員会 上ノ山遺跡発掘調査団
- 18 『半田山古墳群(Ⅳ中支群)』 1988 浜松市教育委員会
- 19 『有東梶子遺跡Ⅱ』 1989 静岡市教育委員会
- 20 八木勝行『静岡県における火葬墳墓について』〔静岡県史研究 第八号〕
1992 静岡県教育委員会
- 21 近藤義郎 藤沢長治 編『日本の考古学 古墳時代(上)(下)』 1966 河出書房新社

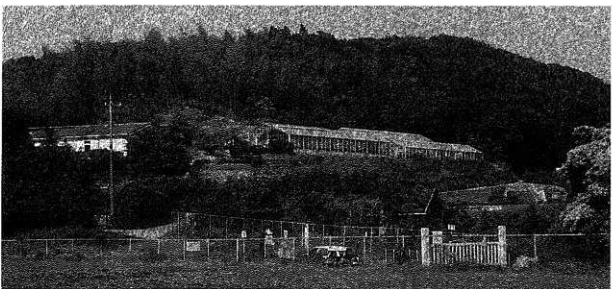
写真図版



古墳群遠景（南から）



検出時遠景



現況遠景



調査前近景 (東から)



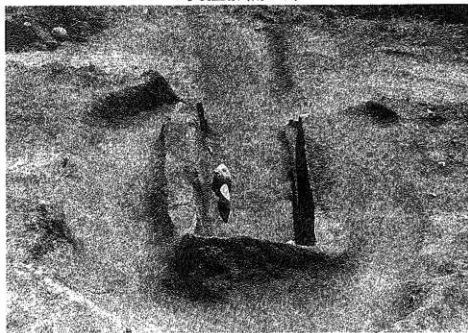
調査前近景 (中央部)



調査前近景 (東方部)



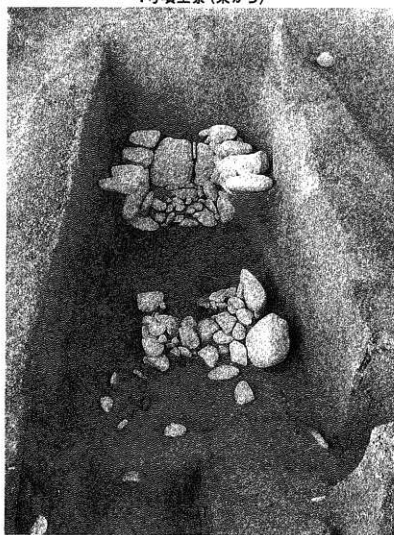
1号墳全景(南から)



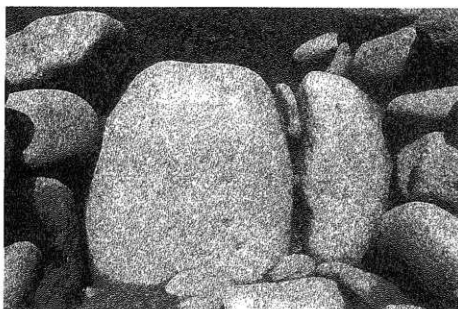
1号墳全景(北から)



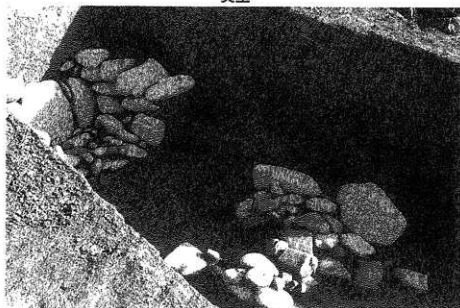
1号墳全景(東から)



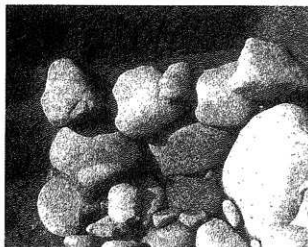
1号墳石室全景



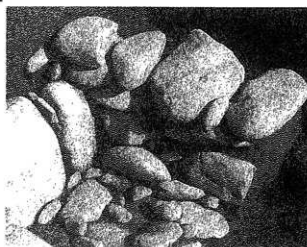
奥壁



東壁

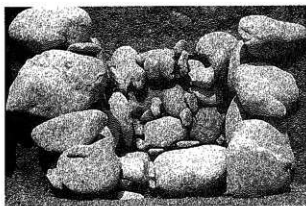


奥壁(西壁)

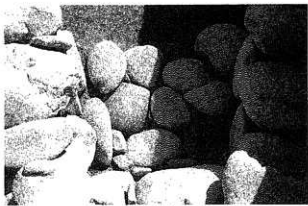


奥壁(東壁)

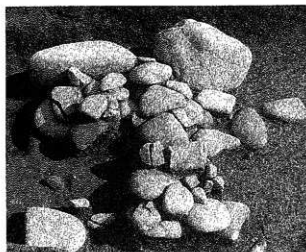
図版 6



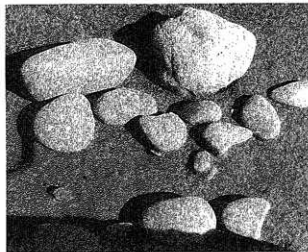
上位礫床面



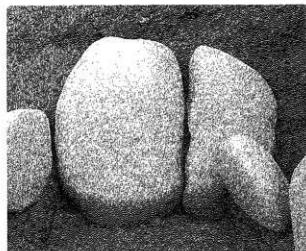
下位礫床面



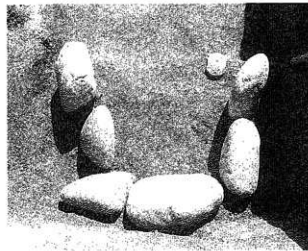
上位礫床面 (中央部)



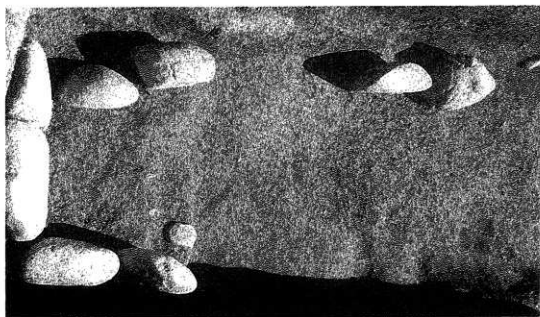
下位礫床面 (中央部)



奥壁 (根石状態)



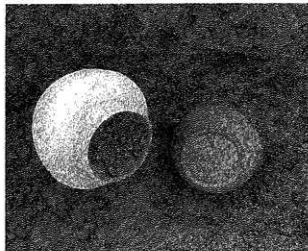
根石



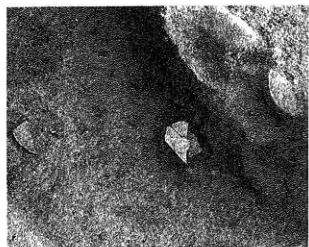
根石状況全景



周溝内遺物出土状況



周溝内遺物出土状況



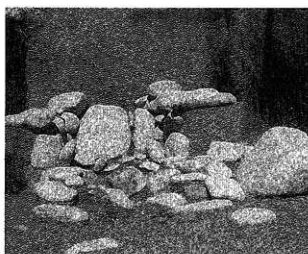
石室内遺物出土状況



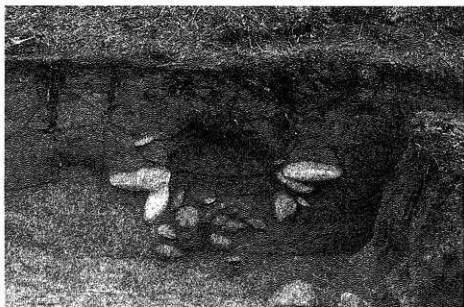
破碎礫散布状況



前溝部遺物出土状況



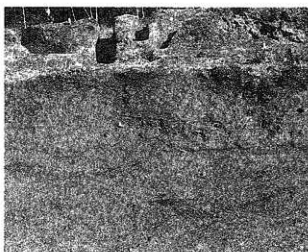
石室検出状況(前溝部より)



検出時土層断面



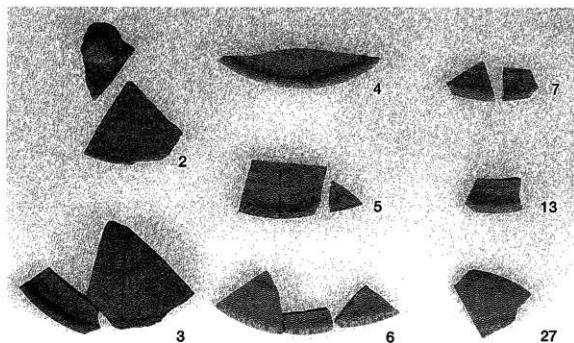
北側周溝断面



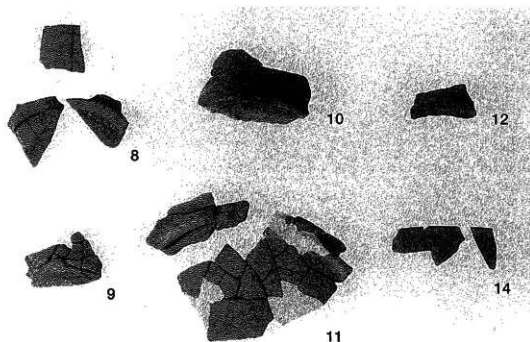
前溝部断面



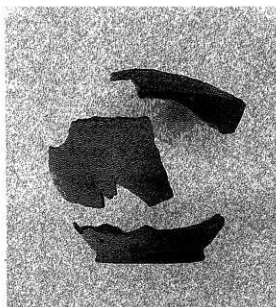
坏盖(1)



坏盖



坏身



壺(18)



坏身(21)



壺(22)



鉄製品(23)



15



16



17



24



19



20



25

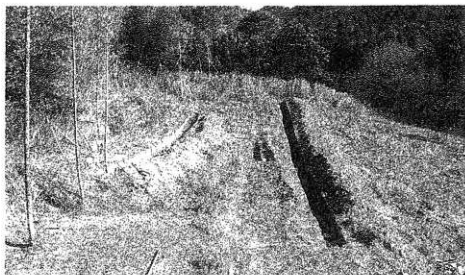


28

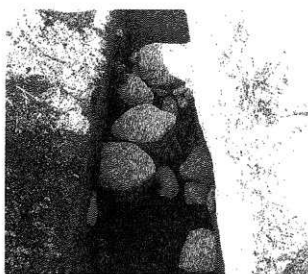


26

1号墳出土遺物(15~17、19、20、24~27)



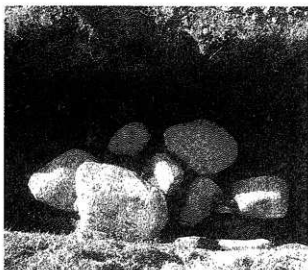
ltr. Jtr. 配置状況



ltr.2号墳



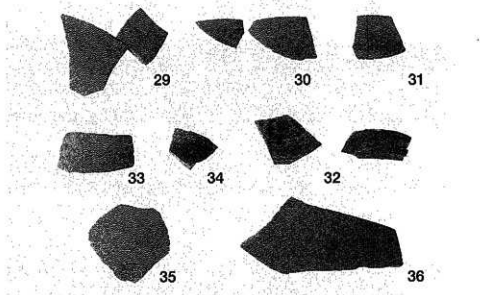
Jtr.3号墳 北壁



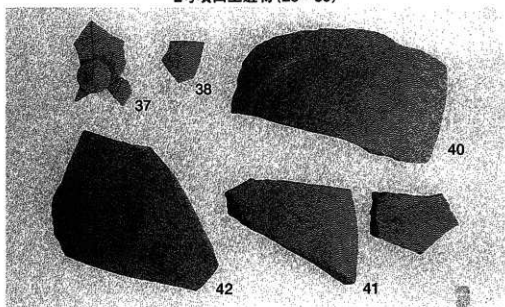
Jtr. 石配置状況



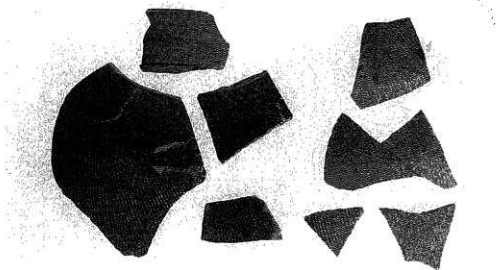
Jtr.3号墳



2号墳出土遺物 (28~35)



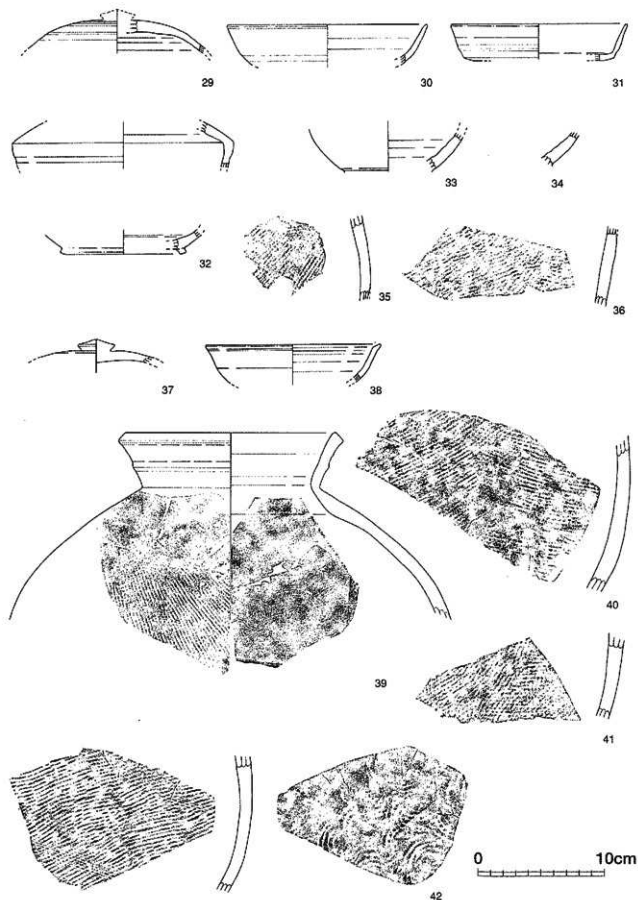
3号墳出土遺物 (36、37、39~41)



2・3号墳出土遺物 (39)

挿図訂正

第13図 (P.24) を訂正し、下図と差し替えます。



第13図 2・3号墳出土遺物実測図(縮尺 $\frac{1}{3}$)

〈報告書抄録〉

ふりがな	いしはらくぼこふんぐん・いしはらくぼいちごうふん
書名	石原窪古墳群・石原窪1号墳
副書名	――
巻次	――
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	38
編著者名	織田 恵・岡村 渉
編集機関	静岡県教育委員会
所在地	〒420 静岡県静岡市追手町5番1号 054-254-2111(代)
発行年月日	西暦1997年 3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 遺跡所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
いしはらくぼこふんぐん 石原窪古墳群	しずおかけんしずおかし 静岡県静岡市 おおや 大谷 あざいはらぼ 字石原窪	22201	207	34度 26分 30秒	138度 26分 30秒	19870107 } 19870131	200m ²	静岡大学 教育学部 自然観察 実習地 造成工事
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
いしはらくぼこふんぐん 石原窪古墳群	古墳	古墳時代 後期～終末期		古墳 3基		須恵器 土師器	3基以上の 古墳群の中の 3基	

静岡市埋蔵文化財調査報告 38

石原窪古墳群

石原窪1号墳

平成9年3月10日

編集発行 静岡市教育委員会

印刷 ナガハシ印刷株式会社

